



# 宗教の政治関與について

—創価学会ケースをめぐつて—

小川正夫

三月八日  
五十九年

初めると、必ず二代三代目の坊主

共が時の権力的政治屋となれ合い

創主の真意を自ら菩薩に踏みじ

る歴史的実事を、吾々はいわとい

うほど見せつけられて来ているか

らである。

昭和十五年十月、吾こそは日蓮

正統派なりと号して、東京神田錦

町に嘔々の声を上げ、「価値創造」

というカリスマの会議を僅か數十

人の会員に配布したのが初めてで

現在、信徒六十万人を有し全国に

甘木ヶ所の支部をもつ「創価学会」

の議會進出も、前述のものとは

一の規範を「一つにする代物に過ぎない

が故に、吾々の関心の主題にはな

らないが、当地協員の同伴者の中

の消極的僚伴だけでは満足しない

人々も沢山いた。心あるアナキス

トはコルネリセンが経済学でやり

スムの分野では防いで呉たが、こ

の消極的僚伴だけでは満足しない

人々も沢山いた。心あるアナキス

トはコルネリセンが絏済学でやり

スムの分野では防いで呉たが、こ





## 近代思想の先駆帖

アナキストの文学

### 小説「坑夫」の生命

秋山清

清

宮鳴賀夫の「坑夫」が發表され

たのは大正五年である。夏目漱石

が死んだ年であり、第一次世界大

戦の最中である。

その死後昭年二十八年に出了自

伝「遍歴」のなかに、前回書いた

雑誌「近代思想」と彼との関係に

ついて次のように述べてある。

「すると多くの露店の中で、灯

りもつけ、後ろの電柱の電気を

利用しているみすぼらしい店があ

つた。そして学生風の男が坐つて

いた。私も何かひかれて、その

前にしやがんで見ると「近代思

想」があつた。三十二頁ほどの書

つべらなものであつたが、それに

大杉栄や荒畠翠村の名を見出した

がよかつた。」

「その時、ほかの文部省楽部や

何かもうと厚い雑誌が四錢かそれ

以下なのに、薄っばら近代思想

刑されたのは三四年前の事だつ

た。」

「その時、ほかの文部省楽部や

何かもうと厚い雑誌が四錢かそれ

以下なのに、薄っばら近代思想

刑されたのは三四年前の事だつ

た。」

「私はこの雑誌によつて、西大

久保の大杉の家で毎週一回、サン

ジカリズム研究会を開かれている

がよかつた。」

「私はこの雑誌によつて、西大

久保の大杉の家で毎週一回、サン

ジカリズム研究会を開かれている

がよかつた。」

「初対面のとき、何を話したか

忘れたが、私は今まで出会つた人

とも書いている。富嶽はそこでは

リズムを知つたのである。

小説は国木田独歩その他にもあり

るが、權力に開された時代の、下積

甲「まあからバクーインには興味

があるんだが、ちよと本屋を

が死んだ年であり、第一次世界大

戦の最中である。

その死後昭年二十八年に出了自

伝「遍歴」のなかに、前回書いた

雑誌「近代思想」と彼との関係に

ついて次のように述べてある。

「すると多くの露店の中で、灯

りもつけ、後ろの電柱の電気を

利用しているみすぼらしい店があ

つた。そして学生風の男が坐つて

いた。私も何かひかれて、その

前にしやがんで見ると「近代思

想」があつた。三十二頁ほどの書

つべらなものであつたが、それに

大杉栄や荒畠翠村の名を見出した

がよかつた。」

「私はこの雑誌によつて、西大

久保の大杉の家で毎週一回、サン

ジカリズム研究会を開かれている

がよかつた。」

「初対面のとき、何を話したか

忘れたが、私は今まで出会つた人

とも書いている。富嶽はそこでは

リズムを知つたのである。

小説は国木田独歩その他にもあり

るが、權力に開された時代の、下積

甲「まあからバクーインには興味

があるんだが、ちよと本屋を

が死んだ年であり、第一次世界大

戦の最中である。

その死後昭年二十八年に出了自

伝「遍歴」のなかに、前回書いた

雑誌「近代思想」と彼との関係に

ついて次のように述べてある。

「すると多くの露店の中で、灯

りもつけ、後ろの電柱の電気を

利用しているみすぼらしい店があ

つた。そして学生風の男が坐つて

いた。私も何かひかれて、その

前にしやがんで見ると「近代思

想」があつた。三十二頁ほどの書

つべらなものであつたが、それに

大杉栄や荒畠翠村の名を見出した

がよかつた。」

「私はこの雑誌によつて、西大

久保の大杉の家で毎週一回、サン

ジカリズム研究会を開かれている

がよかつた。」

「初対面のとき、何を話したか

忘れたが、私は今まで出会つた人

とも書いている。富嶽はそこでは

リズムを知つたのである。

小説は国木田独歩その他にもあり

るが、權力に開された時代の、下積

甲「まあからバクーインには興味

があるんだが、ちよと本屋を

が死んだ年であり、第一次世界大

戦の最中である。

その死後昭年二十八年に出了自

伝「遍歴」のなかに、前回書いた

雑誌「近代思想」と彼との関係に

ついて次のように述べてある。

「すると多くの露店の中で、灯

りもつけ、後ろの電柱の電気を

利用しているみすぼらしい店があ

つた。そして学生風の男が坐つて

いた。私も何かひかれて、その

前にしやがんで見ると「近代思

想」があつた。三十二頁ほどの書

つべらなものであつたが、それに

大杉栄や荒畠翠村の名を見出した

がよかつた。」

「私はこの雑誌によつて、西大

久保の大杉の家で毎週一回、サン

ジカリズム研究会を開かれている

がよかつた。」

「初対面のとき、何を話したか

忘れたが、私は今まで出会つた人

とも書いている。富嶽はそこでは

リズムを知つたのである。

小説は国木田独歩その他にもあり

るが、權力に開された時代の、下積

甲「まあからバクーインには興味

があるんだが、ちよと本屋を

が死んだ年であり、第一次世界大

戦の最中である。

その死後昭年二十八年に出了自

伝「遍歴」のなかに、前回書いた

雑誌「近代思想」と彼との関係に

ついて次のように述べてある。

「すると多くの露店の中で、灯

りもつけ、後ろの電柱の電気を

利用しているみすぼらしい店があ

つた。そして学生風の男が坐つて

いた。私も何かひかれて、その

前にしやがんで見ると「近代思

想」があつた。三十二頁ほどの書

つべらなものであつたが、それに

大杉栄や荒畠翠村の名を見出した

がよかつた。」

「私はこの雑誌によつて、西大

久保の大杉の家で毎週一回、サン

ジカリズム研究会を開かれている

がよかつた。」

「初対面のとき、何を話したか

忘れたが、私は今まで出会つた人

とも書いている。富嶽はそこでは

リズムを知つたのである。

小説は国木田独歩その他にもあり

るが、權力に開された時代の、下積

甲「まあからバクーインには興味

があるんだが、ちよと本屋を

が死んだ年であり、第一次世界大

戦の最中である。

その死後昭年二十八年に出了自

伝「遍歴」のなかに、前回書いた

雑誌「近代思想」と彼との関係に

ついて次のように述べてある。

「すると多くの露店の中で、灯

りもつけ、後ろの電柱の電気を

利用しているみすぼらしい店があ

つた。そして学生風の男が坐つて

いた。私も何かひかれて、その

前にしやがんで見ると「近代思

想」があつた。三十二頁ほどの書

つべらるものであつたが、それに

大杉